

## 『海をあげる』

2022年03月01日

沖縄県で生まれ、琉球大学教育学研究科教授の上間陽子氏の、「Yahoo!ニュース 本屋大賞 2021年 ノンフィクション本大賞」を受賞した『海をあげる』を読んだ。上間氏は、米兵による殺人事件をきっかけに沖縄の性暴力について書き始め、沖縄の女性たちの置かれた実情についての著作を精力的に出している。現在は、沖縄の若年出産をした女性の調査を続けているという。

沖縄は、緑がなくなるほどの激しい艦砲射撃を受け、県民の4人に一人が戦死するほどの過酷な沖縄戦を体験した。戦後も、乏しい中、米軍の執政下で苦しく、屈辱的な生活を送らざるを得なかった。現在も、同じような状態が続いている。

上間氏は、若者たちにインタビューし、彼らの苦悩を報告している。父親の暴力から逃れ、東京でホストをしている若者、性的虐待を受け、風俗産業から抜け切れず、深いトラウマに捉われた女性の話など、読んでいて苦しくなる。「帯」には、シモーヌ・ヴェイユの「半分つぶされた虫のように、地面の上をのたうちまわるような打撃を受けた人々には、自分の身に起こったことを表現する言葉がない」という言葉が書かれているが、そのような人々から言葉を聞き取るのは、どれほどの力があるであろうか。上間氏は本当に優しい人で、驚くほどの忍耐力で心を寄せ、彼ら、彼女たちに聞き入っている。

沖縄の現実が、痛みの中で書かれている。小学生の女の子が米兵に拉致され、3人から強姦された。手のひらに、草を握りしめたまま強姦され、殺された女性がいる。報道されない被害者はどれほどいるだろうか。理不尽な日米地位協定の壁で、沖縄県民は無念の涙をどれほど流しているだろうか。しかし、抵抗する人々もいる。辺野古新基地の是非を問う県民投票に参加しないと叫んだ5市長が参加するまでハンガーストライキを決行した元山仁士郎さんへの県民の支援は心温まるものであった。また、戦争で野ざらしにされたままの遺骨を、40年間も掘り続け、遺族に届ける活動をしている具志堅隆松さんは、沖縄県民の心であろう。戦死者の遺骨を辺野古新基地に埋めるなどの主張は、沖縄県はもとより、全国に賛同者を得た。政府のやることは、戦死者への敬意が全くない。

上間氏は「海が赤くにごった日から、私は言葉を失った」と書いているように、辺野古の海に土が投入されたことに苦しみ「海をあげる」という言葉を転用している。青いバスタオルがないと、眠れない少年がいた。そのタオルが風に吹き飛ばされ、なくなった。探しに森に行くと、二匹のカエルがタオルの中で「うみだ、うみだ!ぼくたちのうみだぞ!」と喜び、戯れていた。夜にもう一度、森に行ってみると、二匹のカエルが「うみってすてきだねえ」とゆったりくつろいでいた。少年は「そのうみはきみたちにあげるよ」と言って、森を立ち去った。上間氏は、この児童童話から、下記のように書いている。「ここは海だ。青い海だ。珊瑚礁のなかで、色とりどりの魚やカメが行き交う交差点、ひょっとしたらまだどこかに人魚もひそんでいる。」「この海をひとりで抱えることはもうできない。だからあなたに、海をあげる」と締めくくっている。部屋で、電車で、川のほとりで読んでいるあなたにあげる。赤く濁っている海を、痛みとして受け止めない本土の読者にあげると、強烈に呼びかけているように聞こえる。辺野古がまだ青い海であった時、訪ねたが、案内する人が「百田さんのお友だちの皆さん」と言われ、ショックだった。百田氏は「沖縄の新聞はつぶせ」と言った人で、沖縄県民から見れば、本土から来た人たちは皆、百田氏と同じで、沖縄の苦しみを理解してないと皮肉られたのである。沖縄からの募金や意見広告の依頼に多少のカンパをしているだけの私は、青い海が欲しいが、いただけそうにない。